そごのせかい

最終話

序文

「全てを描ききった作品には解説など蛇足に過ぎない」、という考えもあるかもしれませんが、逆に作品内ですべてを語ろうとすると作品は無限に冗長になってしまうこともまた事実です。五七五であらゆる背景を持った人に対して何かを表現しようとするなら、やはり解説があった方が良いでしょう。

そう考えると、作品を解釈するために必要となる知識は作品解説のほうに完全にまかせてしまって、作品は作品として表現するべきことに専念する、という開き直った方針もありえるのではないかと考えました。

なので、この作品解説は蛇足ではなく、むしろ作品を構成する一部だと考えていただければと思います。この作品解説自体を「最終話」という位置づけにしたのもそのためです。

「そごのせかい」という作品、この作品解説、そして作品を作るという私の行為それ自体、この３つは有機的に結合していて不可分です。それはこの解説を読んでいただければ分かると思います。

かなり長文になってしまいましたが、おそらくみなさんにとっても非常に有意義な内容だと思いますので、おつきあいいただけたら幸いです。

第1章　あとがき

「**誰も踏みにじられない世界は可能か？**」という問いをずっと考えてきました。

考えてみたら妙なものです。我々は平和で平等でみんなが等しく幸せな社会を目指しているはずなのに、そのような社会を描いた作品を面白くすることは難しく、逆に不幸が蔓延し、お互いに対立しあい、戦い、断罪し、殺し合っているような世界を描いた作品ばかりが世に溢れています。

このような逆説的な状況の理由は、物語を書く人ならおそらくみんな簡単に説明できると思います。我々がある作品を面白いと感じるとき、その面白さは基本的になんらかの**対立構造**から生じているのです（たとえば、「勧善懲悪」とか「ボケとツッコミ」などはその極地です）。物語を書く人ならみんな、登場人物のキャラクター性というものが実のところ他のキャラクターとの殴り合いによってはじめて成立するものなのだということを、よく分かっているはずです。

悲しいことに、我々は生得的にお互いに対立し競争し合うように生物として条件付けられているようです。そしてそれは自然淘汰の産物で、元凶をたどれば最初の生命の誕生に行き着きます。

生きるという行為は元来、お互いの命を奪い合う殺しあいです。**地球生命はお互いに食う・食われるという命の奪いあいの中で、その淘汰圧によって複雑に進化し、多様化してきました。**

我々は他者との協調や平和というものを尊重しがちですが、そういうものも厳しい自然環境や他の生物種との戦いの中で、適応上有利になるために進化させてきたひとつの「戦略」にすぎません。よって、「正義」とか「倫理」とか「道徳」とかいうものもあくまで「**『我々』や『仲間』のために**」のものでしかありません。人間が定めた正義と家畜のブタが定めた正義が相容れることはないでしょうし、ライオンの道徳とシマウマの道徳が相容れることもないでしょう。

「**あれは我々の仲間だ、害さず、益となれ**」「**あれは我々の獲物だ、配慮しなくていい、狩れ、搾取しろ**」「**あれは我々を害する敵だ、戦い、排除しろ**」このような動物的な行為原則が、あらゆる倫理や道徳の根源です。そして「**我々/獲物/敵**」の線引きをどこに引くかによって、種々の正義は成立しています。そしてそのような『我々＝正義』同士の殴り合い、パワーゲームによってのみ、生態系の調和や人類社会は成立しているのです。

それ故にこの世界に仮に平和があったとしても、それは単にパワーバランスが片寄っていて一方が他方に正義を押しつけているだけにすぎず、常にある『我々』の平穏を守るためにある他者を犠牲にするようなシステムの上に成り立っています。家畜のウシやブタが十分な知能をもてば反乱が起きるし戦争になるでしょう。やはり根底にあるのは殺伐とした戦いであり、尊厳の踏みにじり合いに他なりません。

だから、そのような自然の仕組みに則った世界は原理上、常に対立と苦しみに満ちています。仮に平和を求めたとしても、先に挙げたようにそれは誰かの犠牲の上にしか成立しないし、そもそも協調というものが一つの戦略に過ぎない以上は必ず裏切り戦略が存在するので、結局戦いは避けられません。

そうした前提の上で最初の問いに戻ったとき、ひとつの解答であると私が考えているのが、この「そごのせかい」で描いた世界です。

この世界ではお互いが何を考えどう行動するか、という情報が共有されるので、裏切り戦略をとることが原理上不可能となります。よって他者を犠牲にするような利己的な戦略、競争的な戦略は淘汰され、純粋な協調戦略が適応上有利となっていきます。また、相手の心情を自分の心と区別せずに平等に、共感的に理解するようになるため、皆がお互いの心を踏みにじらないように行為す

るように条件付けられます。これにより、意識をもったすべての生物が「仲間」という線引きの内に入ることになります。

さらには、生きるのに必要な知識や技術もすべて共有されるため、誰も生き辛さを抱えることがありません。究極の直接民主主義が達成され、ウソのない、完全な公平と公正が実現し、中央政府や社会的階層も不要になり、資本主義も脱却できます。環境破壊のような共有地の悲劇も当然、回避されるでしょう。他者と競争するための自己利益追求の努力は排除され、カントの「目的の国」の理想のように、純粋に皆が皆の意識的主体としての尊厳を目的として生きるようになります。そしてなにより、それらを全体主義的強制に陥らずに、個人の自由意志を保ったままで、それどころかむしろ個々人の自由意志の結果として、実現することができるのです。

これにより、「誰の尊厳も踏みにじられない世界」に近い世界が達成できるのではないかと考えました。

しかし、そもそも「**地球生命はお互いに食う・食われるという命の奪いあいの中で、その淘汰圧によって複雑に進化し、多様化してきた**」のでした。よって、この世界ではそのような淘汰圧がなくなり、意識を持ったあらゆる動物は協調関係のなかで次第に一つの方向に収斂していくことになるのだと思われます。その先に何が待っているかはよくわかりませんが、少なくとも形質的な多様性が失われる方向にはなるはずです。そしておそらく、意識現象自体が退化して失われる方向に進化していくことになるのではないかと考えています（なぜなら我々のこの意識現象は適応上の有利性から発達してきた形質であると考えられるからです）。

そしてそれこそが、この作品世界の住人たちが熟考の末に結論した、究極の意図なのです。

どちらが正しいか、ということはもちろん客観的に定まる問題ではないので、あくまで好みの問題だと思います。この話の主人公は後者を「好き」だと答えました。私も後者が好きです。

しかし我々は（少なくとも今のところ）前者の世界で生きるしかありません。

だから人を信じることと裏切られるリスクを常に天秤にかけなればならないし、自分や仲間の尊厳を守るためには他者と対立して戦うことは避けられません。そして平和を求めるなら、何らかの正義の押しつけを黙認して自分も含めて誰かの尊厳を構造的に踏みにじらなければなりません。そうやって、だれもが殴り合い・殺しあい・競争のなかに参加し、「我々」の外にいる他者の存在を過小に扱いながら、そしてそれに対してしばしば開き直り、あるいは気づかぬふりをしながら、生きるためにはこの構造に荷担し続けなければなりません。

それはとても辛く悲しい、許しがたい、耐えがたい、本当に耐えがたいことですが、同時にそれによってこの世界の多様性は成立しているのだとも思っています。

私はこの状況を素直に肯定することができません。本当に許せないし、難しいです。